

教師は最大の教育環境

教職教育センター教職指導員 伊藤 善文

2011年10月から教職指導員として着任し、教師を目指す学生の相談を行っています。内容は、教員採用試験の傾向と対策、教師としての心構えなどですが、私の専門である地理も指導しています。学生はとても素直で、若い感性があり、ひたむきな姿に好感をもっています。次代を担う教員として、是非、学校現場で活躍してほしいと願っています。以下、私の中学校・高等学校での教員生活を踏まえ、教職を目指す学生に留意してほしいこと、教育実習の参考にしてほしいことを述べます。

1 穏やかに、簡潔に、具体的に

生徒は多様です。さまざまな家庭環境で育ち、学校で学んでいます。それまでの自分の尺度が生徒にあてはまらないことはよくあります。日ごろから心掛けてほしいことは、生徒に対して、穏やかな表情・態度で接し、説明や表現は簡潔に行い、具体的な指示を出すことです。生徒に対する教師の強権的指導はその場は奏効しても、長期的な効果は疑問です。まずは、生徒を理解することです。登校時のようす、授業前の出席確認時の表情、定時制高校生であれば、職場でのようすなども思い浮かべ、生徒に接してください。簡潔な説明や表現とは、主語をはっきりさせ、新聞の見出し、小見出し、本文をイメージしてはどうでしょうか。具体的な指示とは、「きちんとしなさい」という抽象的な指示ではなく、「〇〇をしなさい」と言いましょ。説明する言葉や話し言葉にも見出しを意識しましょう。

生徒と教師との信頼関係は、日ごろのコミュニケーションから生まれます。教師から生徒への声かけはもちろんですが、生徒から教師への質問や相談は教師の人間性が理解されてこそ成り立ちます。教師の一挙手一投足が生徒の心に刻まれ、影響を与えています。

2 ストライクゾーンは人によって異なる

教師の話しや説明は、相手に理解してほしい、わかってほしいとの思いから行っていますが、その話しは、相手に伝わっているでしょうか。達しているでしょうか。達した後、どうなるのでしょうか。

生徒の理解度や受け止め方はさまざまです。一言言うと理解する生徒、紙に書いて理解する生徒、視覚的にイメージして理解する生徒、何度も繰り返して理解する生徒、理解力・記憶力に特別な能力をもっていると思われる生徒、経験をもとに理解する生徒、理解できない生徒などです。私の教員最初の授業は、中学校社会科公民的分野の「家庭生活」でした。教科書には、家庭の役割の1つは「安らぎの場」と記されていました。私はあまり疑問を抱かず、そのことを授業で説明（板書）しました。その時です。ある生徒が「自分の家庭に安らぎはない」と発言したのです。その生徒にとっては何も分かっていない新米教師が、(教科書に書いているからというだけで、問題意識もなく)通り一遍なことを言うな、と言いたかったのかもしれませんが。私の説明は相手に達しました。しかし、受け止め方は人によって異なります。今でも鮮明に思い出す新卒のころにあびたパンチです。

3 授業で勝負

学校現場で生徒と接する場面はさまざまですが、最大の接点は授業です。教員の授業に対する姿勢が生徒にとって、その科目を好きになる、教師を好きになる、教師を認める（教師として認められる）最大の要素だからです。授業は50分間です。その授業のためにどれくらい準備しますか。最初の教材であれば、人によって異なりますが、最低2～3時間は要するでしょう。教科書等の内容理解、新出用語理解、副教材理解、板書計画、発問内容、ノート作成、プリント作成など、教材研究や指導法の工夫はやろうと思えば、切りがありません。指導案は授業全体をイメージして書きます。教材観（何を教えるのか）、生徒観（生徒の実態はどうか）、指導観（その教材をどのように教えるのか、指導するのか）を考えます。本時のねらいも明確にします。時間配分も考えます。周到な準備をします。ところが、いざ、授業になると、うまくいきません。授業は予定どおり進んだ。しかし、生徒の反応は今一つだった。そんなことはよくあることです。生徒から質問を受けたが即答できなかった場合は、次の時間に必ず解答（回答）しましょう。生徒との約束は必ず守ってください。生徒との信頼関係の基本です。授業を通して、生徒がその教科・科目に興味をもった、さらに勉強したくなったという話しはよく聞くことですが、その陰には生徒本人の努力はもちろんですが、教員の不断の努力が必要です。みなさんは教師をとおしてその科目が好きになったという経験はありませんか。

4 職場内研修—OJT（on-the-job training）

学校現場は授業の他にも、生徒指導、文書作成、成績処理、部活動、保護者との対応など、仕事は多岐にわたります。教員はオールマイティではありません。生徒指導も保護者対応も戸惑うことはしばしばです。生徒の行動や考え方、保護者の考え方が、教員や学校の価値観と異なることもあります。保護者の生きざまを理解することが生徒理解につながり、生徒指導に役立ちます。文書作成が苦手な人もいます。文書作成は「学ぶは真似る」でフォームを理解し、中身は「簡潔・濃密・平明」に書くことに留意してください。この言葉は私が学級通信をつくっていたころ、当時の校長から教わりました。「文は人なり」と言いますが、文章を書くのは何年たっても難しいものです。部活動もあまり経験のない部の顧問になった場合など、負担になることも正直あります。授業、生徒指導、会議、部活動、教材研究と、しんどい日は多いですが、日ごろから同僚とのコミュニケーションを図り、なんでも相談できるような人間関係づくりに留意してください。私は新卒のころから（実は、何年たっても）、新教材になると、授業前は不安で、同僚教員によく教えてもらいました。日々の研鑽、職場内研修こそ、生徒を見る目を養い、教員の資質向上につながります。

5 専門分野を磨く、人間を磨く

私は地理学専攻の社会科教員ですが、阪急岡本駅から甲南大学までの景観にも興味があります。天上川の川底と周りの地形はどうなっているのか。住宅はいつごろからできたのか。甲南大学の標高はおよそ何mか。甲南大学付近の坂と住吉川や六甲山系との関係はどうなっているのか。教員には得意とする分野があるはずですが、自分の興味関心のある分野は問題意識をもって磨いてください。

学校教育の相手は、順風満帆に生活してきた生徒だけでなく、挫折や失敗を経験した生徒もいます。そのような生徒を教え、育てるのですから、教職は生徒の成長の一端を担う重要な仕事です。教師を目指すみなさんはさまざまな経験をとおして、また、書物や教育研究などから自身の人間性を磨いてください。応援しています。